

福井縣下絹織物工業發達に就ての地理學的考察（下）

市 川 渡

工場工業への發展

或地方特有の經濟現象を調べて來ると、勢ひ何故それがその地方特有であるかといふ事を調べた様になつて來る。地理的環境の研究が政治經濟學に深入りして來る。筆者は茲に簡單に絹織物工業への發展に關する歴史的現象に對して地理學的觀察を適用して説明して見ようと思ふ。古來越前は製絹國であつたが、承平天慶の亂以來漸く衰へた。其の後慶長六年松平秀康越前に就封以來機業勃然として復古の勢を現はし、特に北莊紬は公儀獻上品の一となつた。其の後製絹の質頗る精緻なるものを俗に奉書絹と稱したと言はれてゐる。これそも／＼本縣の羽二重の前身とも稱すべきものである。維新前福井に於ては奉書の外綿八丈絹平、七子等にして當時

機業家なく多く中流以下士卒家族の内職に發達し、此等製品の賣買には一定の市場なく一切之を絹屋の手に委託した。當時の絹屋とは仲次問屋にして生絲商及び絹織物商を兼營し生絲を供給し、製品を京阪其の他管外に輸送して販賣してゐた事が知られてゐる。これ即ち家内工業 Working at home より出發してゐる。當時は此の方法が極めて都合よく行なはれた。今日の工場工業の如きものと異なり資本の増減とか勞働賃金の問題とか大量運輸の問題とか云ふ事がなく相當着實な方法で勞力の問題も當時としては適當に分配するを得て農家に於ては副業として之に従事出來たのである。然れども其の後次第に販路の擴大と相待つて生産品の統一、檢査従つて價格の決定と言ふ問題が起り明治十八年

夏には農商務省は技師荒川新一郎氏を本縣に特派して當業者に警告を與へた。其以來羽二重の検査は非常に嚴重になり、明治四十四年には海外輸出の増加と共に終に農商務省は全國羽二重検査を統一する事になつたのである。如斯して家内工業は全く工場工業になつてしまつた。然れども大正六年及七年の當時は各工場は海外需要の激増に促されて地方の婦女子に委托して羽二重を織らした。當時各戸に一、二臺の織機を備へて植付時或は収穫時以外には其の家の婦人達が製織に従事し相當の収入を得たものである然れども其の後絹織物の工場の増加と海外需要の減少とは羽二重價額の低落となり今日尙農家には此の時の遺物たる機臺の淋しく残り往時の思出の種となつてゐるに過ぎない。

現今は輸出羽二重の検査規則及び内規に依り一等品に松、二等品に竹、不合格品に梅の證票を貼付して之を區別してゐる。

若州地方に於ても多小絹織物の產出はあるけれども大部分は越前にして福井市を中心に北は

絹及び絹綿交織物の機業場數、機臺並職工數
(昭和二年末調査)

	機業場數	機臺數	職 工 數		合 計
			男	女	
福井	213	4,809	331	3,169	3,500
足羽	113	1,370	90	965	1,055
吉田	141	4,021	571	2,400	2,971
坂井	141	3,873	680	2,440	3,120
大野	94	2,339	435	1,814	2,249
今立	128	3,720	268	2,230	2,498
丹生	33	553	39	401	440
南條	18	630	38	397	435
敦賀	—	—	—	—	—
三方	—	—	—	—	—
遠敷	2	14	—	18	18
飯坂	2	25	5	17	22
合 計	883	21,854	2,457	13,851	16,303

森田、春江、丸岡、東は大野、勝山方面南は武生、鯖江地方である。都市別に就いて言へば福井市を筆頭に坂井、吉田、今立、大野、足羽、丹生、南條の順序である。

福井縣下織物工業の現狀

縣下織物界の現狀を詳細に述べる事は、茲に

は避けるが製品の主なる種類、動力關係及び最近の機業勃興に就て其の大略を紹介し度い。

絹織物では廣幅物としては縮緬及び壁、羽二重、絹紬、富士絹、縹子が重なるものであり、小幅物としては縮緬及び壁、羽二重及び平絹、特殊物としては帶地、リボン及び絹テープ類である。絹綿交織物では廣幅物としては縹子、ビ

ロード、小幅物としては御召及び縮緬、特殊物としては帶地等が多い。人絹製絹織物として人絹紋羽二重、人絹羽二重、紡經人絹壁、人絹壁人絹紹等が多く。綿織物では廣巾物としては綾綿布、綿縹子、小幅物では縹木綿、白木綿、織色木綿が多い。麻織物としては蚊帳地が非常に多い。其の他モスリンとかメリヤス製品がある

昭和三年中生産高一覽表 (内地向絹織物中には本製及人絹製を合計したり)

用途別	品種別		絹織物	綿織物	毛織物	麻織物	其他織物	リボン類	合 計
	輸出向	内地向							
輸出向	一、六六六、七四	一、三三三、三三	一、三三三、三三	一、三三三、三三	一、三三三、三三	一、三三三、三三	一、三三三、三三	一、三三三、三三	一、六六六、七四
内地向	一、三三三、三三	一、三三三、三三	一、三三三、三三	一、三三三、三三	一、三三三、三三	一、三三三、三三	一、三三三、三三	一、三三三、三三	一、三三三、三三
合 計	三、〇〇〇、〇七四	二、六六六、六六	二、六六六、六六	二、六六六、六六	二、六六六、六六	二、六六六、六六	二、六六六、六六	二、六六六、六六	五、六六六、七四

昭和三年度日本輸出絹織物は一億三千四百五萬九千圓餘で、本縣輸出絹織物は約其の半に達してゐることが知られる。主として此等の製品は濠洲、印度、米國、カナダ等へ送られてゐる又生絲の輸出高は七億三千二百六十九萬七千圓

餘にして絹織物輸出高の約七倍の多きに達してゐる。尙最近は輸出先各國より絹織物特に羽二重の品質低下を理由に苦情を申し込む向が漸次増加して來た。等級の付け方、生絲の統一、織物としての技術の進歩等に關して特に留意する

必要がある。生産の學理的的研究即ち合理化に依りて今迄の舊式な型を破つて百尺竿頭一步を進める必要がある。又在來の白生地物の輸出に満足せず更に加工を加へて染色工業品として輸出する様化學上の研究を特に必要と感ずる次第である。

最近の生絲の海外輸出高の激増は日本生絲を低價に仕入れ各國が此の生絲より加工染色した絹製品は質に於ても我が國のものより遙に優れ従つて價格の高いストックキングとなりて外國市場に現れるのである。これは我が國の製織の粗惡、染色加工の無能を裏書きする最も考慮すべき問題であると思ふ。それ故に生絲として更に利益を得る様に輸出するか、更にそんな消極的方法を捨て、加工品として多額の生産利益を得て販賣するか何れかの方法かをとる事が目下の急務であると思ふ。

越前の地形の部で述べたが、本縣は北陸一般に共通なる様に發電事業を起すに最も適當したところである。現在發電所數三十六箇所其の發

電力二萬九千キロワットにして、企畫中に屬するもの箇所にて五十、發電力に於て八千キロワットとなると言ふ。動力使用機業戸數に就て最も好況時代の大正八、九年度に於て戸數最大であつたが、其の後不況時代に入りて多少衰へたと雖も、眞の意味に於ける機業戸數は減少せずして、却て一時の不安定なる工場の淘汰されたものと言つてよい。極く最近の情況を見るに昭和二年度千九戸が昭和三年度に於て千八十一戸で戸數に於て七十二戸の増加であり、電動馬力數に於ては昭和二年度の三千九百六十九が四千四百五十八で丁度四百八十九の増加である動力の供給に就ては發電能力の充分なる本縣に於ては極めて容易である。

地方的並に局部的觀察をなした後、統計表によつて經濟的總體を調べて見たい。統計的數字は、此迄觀察した諸現象の意義を最も雄辯に物語るものである。又此れに依りて如何に本縣が年々著しい工業的發展を示しつつあるかを見る事が出来る。

第 二

圖

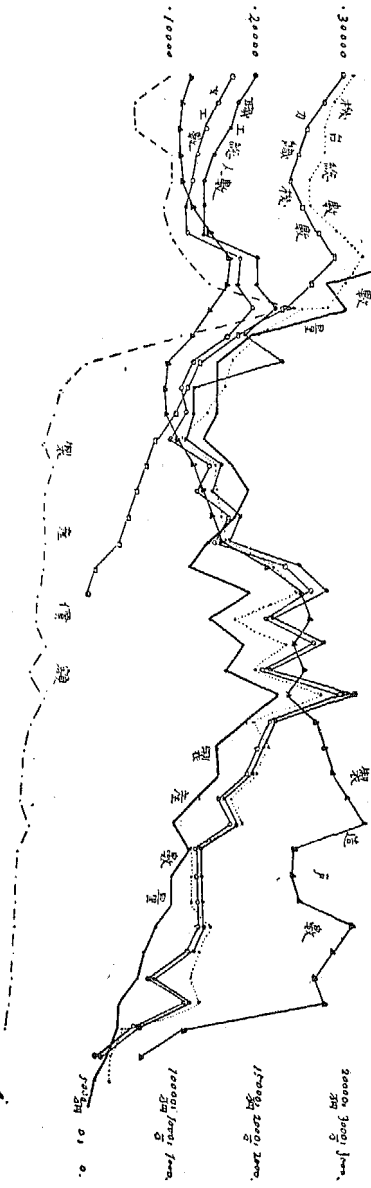
篇 科 機 業 統 計 一 覽 圖

[統計年度自三十五年及以後以該物同業組合總額三年為統計一單位等より取つて1927年、昭和四年六月作之者也]

昭和三年
昭和四年
昭和五年
昭和六年
昭和七年
昭和八年
昭和九年
昭和十年
昭和十一年
昭和十二年
昭和十三年
昭和十四年
昭和十五年
昭和十六年
昭和十七年
昭和十八年
昭和十九年
昭和二十年
昭和二十一年
昭和二十二年
昭和二十三年
昭和二十四年
昭和二十五年
昭和二十六年
昭和二十七年
昭和二十八年
昭和二十九年
昭和三十年
昭和三十一年
昭和三十二年
昭和三十三年
昭和三十四年
昭和三十五年
昭和三十六年
昭和三十七年
昭和三十八年
昭和三十九年
昭和四十年
昭和四十一年
昭和四十二年
昭和四十三年
昭和四十四年
昭和四十五年
昭和四十六年
昭和四十七年
昭和四十八年
昭和四十九年
昭和五十年
昭和五十一年
昭和五十二年
昭和五十三年
昭和五十四年
昭和五十五年
昭和五十六年
昭和五十七年
昭和五十八年
昭和五十九年
昭和六十年
昭和六十一年
昭和六十二年
昭和六十三年
昭和六十四年
昭和六十五年
昭和六十六年
昭和六十七年
昭和六十八年
昭和六十九年
昭和七十年
昭和七十一年
昭和七十二年
昭和七十三年
昭和七十四年
昭和七十五年
昭和七十六年
昭和七十七年
昭和七十八年
昭和七十九年
昭和八十年
昭和八十一年
昭和八十二年
昭和八十三年
昭和八十四年
昭和八十五年
昭和八十六年
昭和八十七年
昭和八十八年
昭和八十九年
昭和九十年
昭和九十一年
昭和九十二年
昭和九十三年
昭和九十四年
昭和九十五年
昭和九十六年
昭和九十七年
昭和九十八年
昭和九十九年
昭和第一百年

機械工業
電力工業
化学工業
金属工業
非金属工業
其他工業
機械工業
電力工業
化学工業
金属工業
非金属工業
其他工業

機械工業
電力工業
化学工業
金属工業
非金属工業
其他工業
機械工業
電力工業
化学工業
金属工業
非金属工業
其他工業



第二圖に示す如く本縣下の總機業戸數及職工數を通覽するに明治二十五年より四十年頃の間までは戸數は非常に多く平均二千六百戸有餘にして又職工數は戸數の割合に少い。こは工場と稱しても極めて幼稚なものであり、幼稚な家内工業的製造戸數の多數存在したことを意味する又當時は力織機の如きも殆んど無く人手を要する足踏、手織機臺の如きものゝ多かりし時である。其の後即ち明治四十年以後戸數は次第に減少し、明治末に於ては半數の千五百戸前後になつたが職工數は相當の數を示してゐる。其の次第に電動力を利用する大規模の織機を使用し始めてより戸數は更に減少して來た。これは工場は擴張せられ工場工業として益々完成の域に達したるため他の小機業場は或は合併され或は自然に廢止の止むなきに至つた結果に依る。又職工は女工多くして男工少く此地方は婦女子の職業として特別なるものなく、又古來より女子繰絲、機織に従事する習慣とされる關係上容易に多くの女工を傭ひ入れる事が出来る。其の上毎

日家庭より通勤せしめ得る關係上頗る便利である。大正四年頃より以後になれば機臺數は急に増加して來るが女工數は増加率が比較的少い。而も力織機の増加は急激にして機臺總數の大部分を占めてゐることがわかる。大工場の増加は却て小さな不完全な工場の減少を意味し、機械の發達及び電力の應用は人手を省き得る故に職工數の増加は割合に少いのである。明治三十七八年日露戰爭當時に於ける縣下機業界の變動は週期的にして、明治三十七年に於ては前年に比し一躍七百萬圓の増加を示した事及び翌三十八年に於ては反對に入百萬圓の急減を實現せる事は蓋し三十七年に於ては戰爭永續に伴ふ生産難と佛國關稅重課實施の見越との爲思惑注文の集中せるに基くものである。大正六年七年八年頃即ち世界戰爭の當時に於ける好景氣時代の發展振りは特に著しく、其の漸落步調を示せるも昔日の比ではない。

歐洲大戰亂勃發以來輸出綿織物の生産は實にすばらしい進展を示した。これは羽二重の如く

三十有餘年間の長き歴史を踏みたるものでなく
 歐米の製力作力減殺に依るため本邦に代用品の供給を求めたるに依る。其の他特に輸出向織物の不況時代に内地物の盛況を呈するが如き場合即ち機業界の變動につれて當業者の機を見るや極めて敏にして、直ちに工場の他方面への利用に少くも躊躇せず着手せる結果、今日は織物の總てを生産する所以である。又生産價額の増減は必ずしも生産數量の増減を意味しない。外國爲替の變動とか海外市場のストックの消化如何の問題とか織物の種類別に依る生産増加の相違に依りて生産總價額は少くとも數量は却つて多い場合がある。

尙本縣織物界の一般を詳に知るには次の文獻を參考にせられたい。特に主なるものゝみを示せば次の如くである。

同	福井縣統計書
同	福井縣勢
同	福井縣織物
同	同業組合
同	統計一覽表
同	三十五年史
同	月報(毎月發行)

結論

縣下絹織物工業の起原に關しては極めて古き歴史を有すると雖も、家内工業時代を経て多量生産の工場工業組織となるには、其の地方には極めて合理的な適合性がなくてはならぬ、越前藩主松平秀康公とか松平春嶽公等の獎勵は勿論の事であり、又縣民の苦心慘膽たる其の努力も實に與つて大なりと言ふべきであるが、筆者は初めから工業發達の起原や歴史的變遷を無理に研究しないで現在の地理學的狀態を研究して批判説明をして來たのである。兩研究共正しいもので兩者相容れぬものではない。併し或る人が此等の事象を歴史的方面からのみ研究する事が許されるのならば、又同様に地理學的方面からのみの研究も權利があり認められねばならぬ。然しながら兩研究の共力は極めて必要な事であり、更に最近は優れた歴史的著作は優れた地理學的基礎の上に行はれてゐる。更に歴史を地理學によつて説明せんと試みられてゐる。

筆者は本縣下が養蠶地として適合してゐるこ

と、又若州の生絲の如きは極めて品質の良好なるものを出す事柄は注目すべき事であり、織物業に重要な關係を持つ氣候風土が極めて適合してゐる事實とか、其の技術に於て傳統的に優秀な素質を具備してゐることとか、土地の狹少にして人口の過剰は職工を得るに容易なる點とか其の他地形上から見て電動力を豊富に得られる事等あの特種の歴史的現象に對して餘りに多くの地理學的論據に依りて説明されねばならぬ好

正 誤

地球誌第十三卷第三號五三頁所屬「富士山ノ標高ニ就テ」ノ記事申五六頁上段四行目「標高決定ニ關シ云々」以下ノ部ハ五四頁「三、新設富士山三角點ノ標高」ノ末項ニ記述セラル
ヘキモノニ付キ訂正ス。

題材に恵れてゐる。

今後産業の學術的研究に依る手段に依りて更に養蠶業の隆盛、良生絲の増收、絹織物の品質向上、染色加工品としての絹織物輸出増加に特別專念する必要があると思ふ。それは近き將來に於て世界の絹織界に君臨する所以ともならう。筆者は茲に地理學的に極めて簡單ながら絹織物工業發達に關して考察したまでである。

(昭和五年一月七日)

地球學園へ市川渡君ノ住所ヲ知ラセテ下サイ。